

此の勝利門から真直に、王宮前の四角な大廣場に通じてゐたので、この廣場の周りには、大きい石造の建物があつたが、其の中最も重要なのは、國の聖殿とせられたバイヨンであり、之が首都の幾何學的中心に位置してゐるのでも重要な建物である事が分る。其の三重に段階をなしてゐる圍牆には、顔面を彫りつけた塔が聳えてゐる、其の數四十を降らない。之も森に侵されて全く破壊し去られる所であつたのはいふまでもない事である。不幸にして已に非常に荒れてはゐるたが、其の大體は、コマイユ Commaille 氏不撓の努力で保存せられ、今日では、その第一第二の兩步廊を周つて、古代カンボヂアの文明で飾つてゐる浮彫を知るのは極めて容易である。之には陸海戰の様を寫してもあり、日常生活の様をも圖してゐるのである。

今度は、王宮見晴し臺になつてゐる石疊の方へ行かう。之は、廢墟保存の現主事マルシャル Marchal 氏が、細部まで元の通り補正を行つたもので、之に現はしてゐる騎象狩獵の有様や、獸形の奇異な柱を賞美しよう。其の高さ二メートル長さ二百メートルに及ぶ石疊の飾になつてゐる。又、ピメアナカス